

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	おほちがふぐり考
Author(s)	広戸, 惇
Citation	ニダバ, 5 : 1 - 7
Issue Date	1976-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046305">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046305</a>
Right	
Relation	



おほちがふぐり考

広 戸 博

1. 語 史

書 名	年代		語
1 新 選 字 鏡	898 ~ 901	<p>蠶 蛸 上芳遙反下市遙反凡上七字訓同伊比保牟志利又阿志(天治本)</p> <p>蠶 蛸 上芳遙反下市遙反蠶蛸之子阿志方支又阿支加良女又於保地不久利(享和本)</p> <p>蛸 稜吉反蠶蛸也蛸伊比保牟志利蛸之母也(享和本)</p> <p>蟬 足万豆比(天治本・享和本)</p>	<p>イヒボムシリ</p> <p>アシ</p> <p>アシマキ</p> <p>アシカラメ</p> <p>オホチフクリ</p> <p>アシマツヒ</p>
2 本 草 和 名	918	<p>桑蠶蛸一名蝕虺(注略) 蟬蛸一名船蟬(注略) 一名膏焦</p> <p>出性一名不過(略) 蠶蛸一名博雌(注略) 一名蟬蛸(注略) 和名於保知加布久利</p>	オホチカフクリ
3 康 頼 本 草		<p>桑蠶蛸 味A甘平无毒。於々知加不久利。又云伊保之利也。二月三月採之蒸之(Aは齒偏に感)</p>	オオチカフクリ
4 延 喜 式	927	<p>諸国進年雜藥(略) 攝津国桑蠶蛸二斤、伊勢国桑蠶蛸一斤、尾張国桑蠶蛸二兩(略)</p>	オホチガフクリ
5 倭 名 類 聚 鈔	931 ~ 937	<p>蠶 蛸 二音 一名蟬雌 博焦二音和名於保知加不久里 蟬蛸子也</p>	オホチカフクリ
6 医 心 方	984	<p>桑蠶蛸 <small>クハラキヲ イボシノコ又オホチカラメ</small> 桑蠶蛸</p>	<p>オホチカフクリ</p> <p>イホムシリノコ</p>
7 類 聚 名 義 抄	1081 ~ 1100	<p>蠶 蛸 オホチガフクリ アシマキ アシカラミ</p>	<p>オホチガフクリ</p> <p>アシマキ</p> <p>アシカラミ</p>
8 色 葉 字 類 抄	1144 ~ 1180	<p>蠶 蛸 オホチカフクリ アシマツヒ</p>	<p>オホチカフクリ</p> <p>アシマツヒ</p>
9 世 俗 字 類 抄	平安未	<p>蠶 蛸 オホチカフクリ 蟬蛸子也</p>	オホチカフクリ
10 伊 呂 波 字 類 抄	1315	<p>蠶 蛸 オホチカフクリ (略)</p> <p>蟬 蛸 イホムシリ和名ヲオホチカフクリ(略) 蟬 <small>アシマツヒ</small> 蟬イ</p>	<p>(鎌倉時代 一八九二)</p> <p>オホチカフクリ</p> <p>アシマツヒ</p>

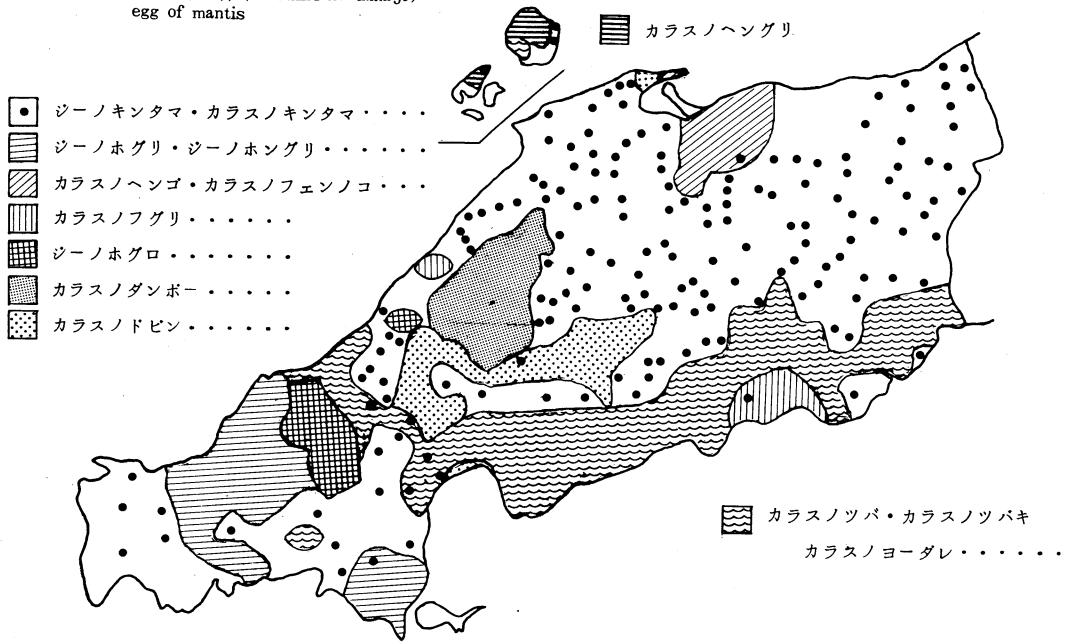
11	温故知新書	1484	オホホチカフクリ 草本 澄字 加多リ 蛸 <small>ト</small>	アシマトヒ
12	運歩色葉集	1548	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトヒ
13	運歩色葉集 本京大	1571	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトヒ
14	下学集 年文明十一 本本	1479	蛸 <small>ト</small>	アシマキ
15	(伊) 節用集 文明本	1474頃	アト <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトイ
16	(伊) 節用集 饅頭屋本	～1581	蛸 <small>ト</small>	アシマ
17	(伊) 節用集 年天正十八 本本	1590	蛸 <small>ト</small>	アシマトイ
18	(伊) 節用集 早大本	～江戸 中期	蛸 <small>ト</small> 子娘	アシマトイ
19	(印) 節用集 本弘治二年	1556	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトイ
20	(印) 節用集 本永祿二年	1559	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトイ
21	(印) 節用集 經亮本	1552～	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトイ
22	(印) 節用集 堯空本	室町 末期	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトイ
23	(印) 節用集 枳園本	室町 末期	アト <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 子娘 也	アシマトイ
24	節用集 乾本	室町 末期	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> (蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> )	アシマトイ
25	節用集 易林本	1597	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> (蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> )	アシマトヒ
26	塵 芥	～1550	アト <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	アシマトイ
27	分類体辞書	～1550	アト <small>ト</small>	アシマトイ
28	日葡辞書	1603	アシマトイ又はアシマトリ 或る長い虫	(江戸時代) アシマトイ アシマトリ
29	訓蒙凶彙	1666	蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> おほじがふぐり 蛸 <small>ト</small> 同 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 房也	オホジガフグリ
30	新刊節用集大全	1680	おほじがふぐり 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	オホジガフグリ
31	書言字考節用集	1698	アト <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 房也 出 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 子 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 全 房也 出 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 子 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small> 全	ヲラヂガフグリ
32	蘭例節用集	1815	おほじがふぐり 蛸 <small>ト</small> 蛸 <small>ト</small>	オフヂノフグリ

33	和漢三才図経	1712	桑 <sup>ホハフ</sup> 蛸 <sup>フグ</sup> 蛸 <sup>リ</sup> (略) 和名於保知加不久里(略) 生 <sup>ス</sup> 桑樹枝 <sup>ニ</sup> 者 <sup>一</sup> 入 <sup>ル</sup> 葉用 <sup>ヲ</sup> 味甘 <sup>ニ</sup> 平 <sup>ニ</sup> 肝 <sup>ヲ</sup> 腎 <sup>ヲ</sup> 命 <sup>ヲ</sup> 門 <sup>ヲ</sup> 、 藥也 <sup>ナリ</sup> 勿 <sup>シ</sup> 用 <sup>ハ</sup> 楝 <sup>ノ</sup> 樹 <sup>ノ</sup> 上 <sup>ニ</sup> 生 <sup>ル</sup> 者 <sup>一</sup> (略) 村人每 <sup>ニ</sup> 灸 <sup>ル</sup> 焦 <sup>ラ</sup> 飼 <sup>ハ</sup> 小兒 <sup>ニ</sup> 云 <sup>ク</sup> 止 <sup>ム</sup> 夜 <sup>ノ</sup> 尿 <sup>ヲ</sup> (略)	オホヂガフケリ
34	箋注倭名類聚抄	1827	郝日、廣雅以 <sup>テ</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> 爲 <sup>ス</sup> 鳥 <sup>ノ</sup> 液 <sup>一</sup> 、西陽雜 俎、以 <sup>テ</sup> 爲 <sup>ス</sup> 野 <sup>ノ</sup> 狐 <sup>ノ</sup> 鼻 <sup>ノ</sup> 液 <sup>一</sup> 、今驗 <sup>ス</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> 初 <sup>ニ</sup> 著 <sup>シ</sup> 樹、未 <sup>ダ</sup> 凝 <sup>ル</sup> 時 <sup>ニ</sup> 有 <sup>リ</sup> 似 <sup>シ</sup> 鼻 <sup>ノ</sup> 液 <sup>一</sup> 、(略)	
35	本草綱目啓蒙	1803	桑 <sup>ノ</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> ヲ <sup>シ</sup> ジガフケリ <sup>ト</sup> 和 <sup>ノ</sup> 名 <sup>アリ</sup> 、 <sup>シ</sup> ヲ <sup>シ</sup> ジノフケリ <sup>ト</sup> 京 <sup>ノ</sup> 同 <sup>名</sup> ウシノフケリ <sup>ト</sup> 佐 <sup>ノ</sup> 州 <sup>ノ</sup> カマキリノス 秋 <sup>ノ</sup> 深 <sup>キ</sup> 寸 <sup>ハ</sup> 雌 <sup>ナル</sup> 者 <sup>ノ</sup> 樹 <sup>ノ</sup> 枝 <sup>ノ</sup> 上 <sup>ニ</sup> ヲ <sup>イ</sup> テ <sup>テ</sup> 巢 <sup>ヲ</sup> 作 <sup>ル</sup> 初 <sup>ハ</sup> 唾 ヲ <sup>吐</sup> カケタルガ如 <sup>シ</sup> 日 <sup>ヲ</sup> 經 <sup>テ</sup> 堅 <sup>ニ</sup> 凝 <sup>シ</sup> テ古 <sup>ノ</sup> 紙 <sup>ノ</sup> 塊 <sup>ノ</sup> 如 <sup>シ</sup> 長 <sup>サ</sup> 一 <sup>寸</sup> 許 <sup>淺</sup> 黒 <sup>色</sup> 或 <sup>ハ</sup> 微 <sup>褐</sup> ヲ <sup>帶</sup> フ是 <sup>ノ</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> 蛸 <sup>ナリ</sup> 藥 <sup>ニ</sup> ハ 他 <sup>ノ</sup> 木 <sup>ノ</sup> 上 <sup>ノ</sup> 者 <sup>ヲ</sup> 用 <sup>ヒ</sup> ズ只 <sup>桑</sup> 枝 <sup>ノ</sup> 上 <sup>ノ</sup> 者 <sup>ヲ</sup> 採 <sup>ル</sup> 故 <sup>ニ</sup> 桑 <sup>ノ</sup> 蛸 <sup>ノ</sup> ト云 <sup>フ</sup> (略)	ヲ カ マ キ リ ノ ス リ

36 おほぢのふぐりがはげかはりたる。いぼじりのかたちをとがむる心などつらね侍るべし 山之井一  
六四八(日本俳書大系)

出典 1・13・21・26・27 京都大学国語学国文学研究室編、17・30 京都大学国語学国文学研究室  
蔵、2・5 日本古典全集、3 続群書類従、4・7・10 風間書房、6 古事類苑、8 中  
田祝夫・峰岸明 風間書房、9 雄松堂、11・12 中田祝夫・根上剛士 風間書房、14 中田  
祝夫・林 義雄 風間書房、15・16 中田祝夫 風間書房、18・19・35 杉本つとむ 早稲田  
大学出版部、19・20・22 中田祝夫 勉誠社、23・25 天理図書館善本叢書、24 白帝社、28  
勉誠社、31 中田祝夫・小林祥次郎 風間書房、32 臨川書店、33 吉川弘文館、34 暁社出  
版部。

Fig. 37 かまきりの卵 (kamakiri no tamago)  
egg of mantis



今、諸史を通覧すると、「かまきりの卵」は古くからオホヂガフグリと呼ばれていた。全国方言辞典によれば、ジーガフグリが、「かまきりの幼虫」として愛媛県南部と記載されている。これは卵の誤であろう。秋が深くなると、木の枝に生みつけられたカマキリの卵は、本草綱目啓蒙によれば、初は唾を吐きかけたようで、次第に固まり、古紙の塊のようになり、長さ一寸ばかり、浅黒色または黒褐色で、翌年夏の殻を破って沢山のカマキリの子が出て来る。「夏月蟻螂生まる」と言われるものである。オホヂは名義抄に、祖、祖父オホヂとある。ジーガフグリとは爺が陰囊のことである。

## 2 中国地方の分布と解釈

地図は拙著「中国地方五県言語地図」(以下、五県地図と呼ぶ)37番の分布図をまとめたものである。

### (1) ジーノホグリ、ジーノホングリ系

古辞書にあるオホヂガフグリの直系である。五県地図のジーノホグリ、ジーノホングリ、ジーノヘングリ、ジーノホガラをまとめたものである。ジーノホガラは山口県50番(五県地図の地点番号。以下同じ)にのみあるが、ホガラは煙草のキセルの中に残った燃えかすをいい、直接の関係はない。フグリの転と思われる。

### (2) カラスノフグリ系

岡山県南岸に僅かではあるが分布する。フグリの形を残している。マツフグリは「松かさ」であり、「松かさ」が陰囊に似ているからいう。全国方言辞典によれば、現在陰囊をフグリと言うところは秋田県鹿南部、岩手県遠野、宮城県、千葉県安房郡、佐賀、南島となり、松かさをフグリ、マツフグリというところはさらに広く、東北から新潟、滋賀、岡山、広島、香川、大分各県などさらに広い分布を持つ。

さて、カラスとは何か。言語地図の解説にも説いたが、鳥は物忘れの鳥といわれている。カラスノウメグヒという諺がある。江戸語大辞典によれば、「からすのうめぐい(鳥の埋食)」の項に諺として、鳥は忘れっぽい鳥で、栗の実を土の中に埋めたくわえておきながらすぐ忘れてしまう。欲ばるくせに忘れっぽい事(人)のたとえとして嘉永二年・教草女房形気の例文がのせてある。五県地図の鳥取県の17番にカマキリの卵をカラスノイケグリ、隠岐島島後に三か所もカラスノウメグリがある。秋にカマキリの枝に産みつけた卵をカラスが忘れたフグリ(キンタマ)と説明しなければならぬところを、カラスノイケグリ(イケルとは、生で保存するをいう)、カラスノウメグリという。元来はカラスノフグリが、フグリの意味が不明となって、諺の「食い」が栗に代ってしまったものと考えられる。こうして、中国地方ではジノフグリは、カラスの忘れたカラスノフグリとなってしまった。

### (3) ジノホグロ系

ジノホグロは島根県石見西部県境と少し東に一か所あるが、途中をドビン系、ツバ系に分断されたもの。ホグロは痣の少し大きいもの、直径1糎半位をいう。大きいものはホヤケという。ホグリの意味が不明となり、似た名のホグロに代ってしまったものであろう。

### (4) カラスノダンボー系

石見東部、広島県の一部、出雲の西部の中国山脈中に一団となっているが、ダンボーは島根県方言辞典によれば、1. つばみ蕾。石見の鹿足郡(柿木、六日市)、益田市(真砂)、邇摩郡。2. 球状のもの。石見の益田市(真砂)。2. 罌丸。陰茎。石見の邑智郡とある。カラスノダンボールの中心は邑智郡であり、一般にいうキンタマをダンボーという。これもカラスノキンタマと同じ意味である。

### (5) カラスノヘンゴ、カラスノフェンノコ

この地方にはこの外カラスノフンゴロ、カラスのヒョング、ヒョング、その後の調査によれば、鳥取県17番にはカラスノヘンゴがあった。五県地図より東にふくれているのはそのためである。倭名抄に陰核、俗云扁乃古。名義抄にヘノコ、古辞書、節用集、倭玉篇には同じようにヘノコと記載され、陰核、陰根、男根、人勢などの漢字が当てである。元来は罌丸を指したものが、次第に範囲を広くして男根、さらには全体をさしたものと思われる。鳥取県西部と島根半島にあるカラスノヘンゴ、カラスノフェンノコは、17番に現存するカラスノヘンゴの転であり、この地方では、全体を指してヘノコ、ヘンゴなどと呼ぶ。かつてはフグリであったものが、フグリが忘れられ、男根のヘノコのみ残るようになって、この名称が生じたものと思われる。

### (6) カラスノヘングリ系

隠岐島にはカラスノヘングリが4か所ある。フグリ→ヘグリ→ヘングリの変化と思う。空白のところは、鳥取県中部も同じく、カマキリノタマゴ、カマキリノコ、カマキリゴ、カマカケノス、カマカケノタマゴなどと呼ばれる地帯である。隠岐ではフグリから変化したヘングリの意も今は不明で、灰に水をかけると塊ができる。これをヘグリ(ハイグリの転)という。この地方の人はヘグリに似るからヘングリというという。その後の調査で、隠岐8番にカラスノヘグリ、カラスノヘンゴがあった。

### (7) カラスノドビン系

ドビンは陰囊全体を指す。フグリと無縁のものではない。島根県86番では、病的に陰囊の大きいのを

指して形の類似からドビンという。広島県、島根県に広くドビングがある。(他の県にもあろう)。生まれたばかりの小鳥の子は羽毛がない。その形は男の幼児の陰囊全体とよく似ている。ドビンの子、ドビングである。カマキリの卵の堅くなって木の枝にぶらさがっているのをカラスノドビンと言ったのである。隠岐島にあるカラスノドベのドベも全鳥卵をいう。

#### (8) カラスノツバ系

ツバは唾で、ツバキと一般にいう。ヨダレは、元来、カマキリの卵は薬として用いられたもので、生みたては、本草綱目啓蒙にあるように、ツバに似て居り、固くなったものは薬用として用いられた。本草和名、康頼本草、医心方に桑螵蛸とあるのは、本草綱目啓蒙にあるように桑の木に生みつけたのではないと薬用にはならぬという。延喜式に諸国から献上したのも薬用のものと思われる。中国地方のこの地帯では、子供にカマキリの卵をなめさせると(または食べさせると)ヨダレが止まるという。島根県石見の20番、山口県の95番でも同じことをいう。広島県63番では黒焼きにしてつけると火傷の薬によく、飲むと風邪の薬になるという。同54番ではぜんそくの薬という。地図では、カラスノツバ、カラスノツバキ、カラスノツバケ、カラスノヨダレ、カラスノヨダレを同じものとして地図に画いてみた。

### 3. 中国地方のカマキリの卵の歴史

第一にジークとカラスの関係であるが、語頭にジークのつく語の分布は山口県全域と島根県石見の山口県に接する地帯にあり、中央にはなく、東部は鳥取県の東端とこれに接する岡山県の東北端に分布するところから見ると、中国地方に関しては東西両端にジークが分布、その中間をカラスが占めているところをみると、ジークが古い。古文献と一致する。山口県の両端と鳥取県東端、岡山県東北端はジークが頭初につくが、ジークノフグリ系ではなくてジークノキンタマである。すると、ジークからカラスへは、

ジークノフグリ→ジークノキンタマ→カラスノキンタマ と考えられる。岡山県南部海岸のカラスノフグリを考えれば、ジークノフグリ→カラスノフグリ→カラスノキンタマとも考えられる。何れにせよ最も古い層はジークノフグリ(ジークノフグリと同一ではなく、山口県などジークノフグリ、ジークノフグリであるが、一応ジークノフグリとする)と言える。島根県西部のジークノフグリもこれに入れる。次に、ジークノフグリの変じたカラスノフグリ(岡山県南部)、カラスノフグリ類(鳥取県西部)、隠岐島のカラスのフグリもこれに入れる。これらはキンタマより古い形とみる。キンタマはいつ発生したか、1624年、寛永元年の、きのうはけふの物語に「きんをシムルハ、いっちメイワク」と出ている(大言海)ところから、キンタマはもっと古くからあったと思われる。節用集釈本には陰囊核キンとあり、書言字考節用集には卵丸、陰核、キンダマと濁音となっている。このカラスノキンタマを第三の出現とする。その後広島県にはカラスノドビンが発生し、すぐ北にはカラスノダンボーが発生した。カラスノキンタマに刺戟されて、一つは似ているドビンを、一つは球状のものゝ総称で、ことに卵丸に多く用いるダンボーを活用した。ドビンは広島市の南端まで達した。これを第四とする。一方瀬戸内海には、幼児のヨダレを治す薬としてのカラスノツバ(ヨダレ)、これもカラスノキンタマに刺戟されて発生した。これは勢が強くドビンの南を通して日本海側にのびて行った。石見西部の高津川を下ったものと思われる。これを第五とする。すると中国地方の系譜は次のようになる。

(1)ジーンフグリ→(2)ジーンキンタマ・カラスノフグリ→(3)カラスノキンタマ→(4)カラスノドビン・カラスノダンボー→(5)カラスノツバ

#### 4. アシマトイの語史

カマキリの腹には寄生虫をよくみかける。細い針金のような黒い虫である。出雲ではイトカネムシという。全国方言辞典では、アシガラミ 千葉県山武郡、神奈川県津久井郡。アシマキ 静岡、奈良、鹿児島県肝煎郡。ウズマキ 静岡県庵原郡。モッテムシ 岡山。モッテンムシ 奈良とある。京都府南部ではモットイムシ、大阪府寝屋川市ではモッテンムシという。以前女が髪を結う時、黒い紐を用いた。これをモットイと言い、この紐に似ているからこの名がある。さて、日本国語辞典の「あしまとい」の項に、昆虫「はりがねむし(針金虫)」または「かまきり(蠮螋)」の異名。〈季・夏〉(略)鼻紙袋「蠮螋アシマトヒ イボシリ」俳諧・薦獅子集「蠮螋(かまきり)の先にすすむや足まとひく(巴水)」とあり、アシマトヒとイボシリを鼻紙袋の例などからであろう、かまきりの異名とあるが果してそうであろうか。今語史をみると、新撰字鏡、類聚名義抄には蠮螋に、新撰字鏡の天治本はイヒホムシリ、アシの訓を出している。アシ、アシマキ、アシカラメ、アシマツヒをアシマトイの別名と見るならば、天治本はイヒボムシリ(かまきり)とアシを同じものにみている。しかし享和本は、蠮螋に蟋蟀之子アシマキ、アシカラメ又オホチフクリとして、蠮螋は蟋蟀つまり蟋蟀(かまきり)の子であり、アシマキ、アシカラメ、オホチカフクリというと解される。更に享和本は蟀の漢字を出して、アシマツヒといている。一方にはカマキリの子に二種あり、一つはハリガネムシ(アシマトイ)であり、一つは木に生みつける泡状のオホチガフグリであるといっていると解される。私も小さい頃、ハリガネムシ(アシマトイ)がカマキリの腹から出るのを見て、カマキリの子と思い、あまりにも違った姿にいつもとまどったのを思い出す。語史で見ると、享和本以来アシマトイは蟀で一貫しているといつてよい。日葡辞書にアシマトイとアシマトリがあるが、古来語史の上ではアシ、アシマキ、アシカラメ、アシマツヒ、アシマトヒ、アシマトイ(アシマドイ)といっている。今はハリガネムシが共通語のようであるが、さきに述べた全国方言辞典の例からみると、アシガラミが千葉県、神奈川県にあり、アシマキが静岡県、奈良県に、さらに鹿児島県にもあるとすると、アシマトイ系は京都府及びその周辺はもとより、全国に広く分布していると思われる。